

B-5

日本語学会第 156 回大会予稿集 (東京大学) 2018.06.23.

日本語を母語とする幼児の右方転位文における主語の格標示について*

團迫雅彦 (九州大学)

dansako@lit.kyushu-u.ac.jp / dansako@hotmail.com

概要

- ・ 幼児の右方転位文(OVS 語順)では主語の格助詞の「誤用」は観察されない。
- ・ (主語の) 右方転位文では必ず主語が TP 指定部に移動し、主格の格標示がなされる。
- ・ 右方転位文は左方移動によって派生されるとする黒木(2006)の主張を支持する。

1. はじめに

- (1) a. 太郎が りんごを 食べたよ。 (SOV 語順)
 b. りんごを 食べたよ, 太郎が。 (OVS 語順, (主語の) 右方転位文 (後置文))
- (2) 幼児の「誤用」パターン①: 与格主語
 a. A ちゃんに食べちゃう。 ‘A(=I) will eat it.’ (A, 2;7)
 b. お母さんに読んで。 ‘Mother, please read this.’ (Aki, 2;8)
 c. 猫ちゃんに行くんだって。 ‘(I) hear kitty going away.’ (Tai, 2;2)
 (Watanabe 2008, Murasugi and Watanabe 2009, Sawada, Murasugi and Fuji 2010)
- (3) 幼児の「誤用」パターン②: 属格主語
 a. ジュンのこわった (=壊した) ぞー。 ‘Jun broke (the tire).’ (Jun, 2;2)
 b. タイショウ君の作った。 ‘Mr. Taisyoo made (this).’ (Tai, 1:11)
 c. モコの笑っちゃった。 ‘Moko has laughed.’ (Moko, 2;3)
 (鈴木 2007, Murasugi and Watanabe 2009, Sawada, Murasugi and Fuji 2010)

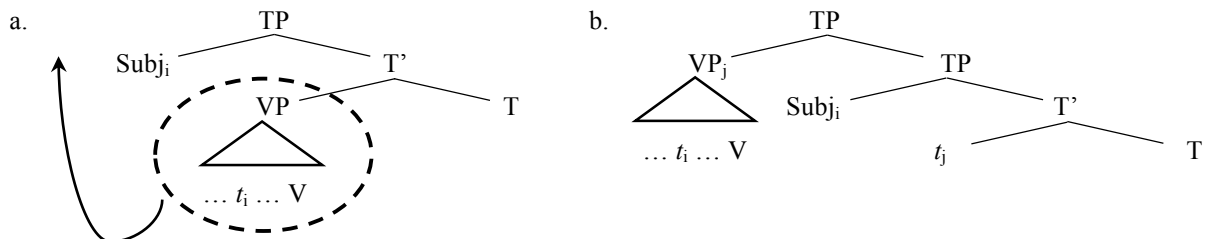
(2)や(3)のような格助詞の「誤用」を含む文は, S(O)V 語順である。

→ (O)VS 語順では「りんごを食べたよ, 太郎に (の)。」のような「誤用」が起こるのか。

2. 先行研究

2.1. 右方転位文の派生

(4) 1 文分析 (remnant VP の前置) (cf. 黒木 2006¹)



* 本研究は JSPS 科研費 16K16826 (若手研究 (B) 『主語の格標示に関する統語理論の言語獲得からの実証的研究: 熊本方言を対象にして』, 研究代表者: 團迫雅彦) の助成を受けている。

¹ 黒木(2006: 219)では, (ia)のように目的語が VP 指定部に顕在的に移動し, その後, (ib)のように VP が様態句(MdP)の指定部に移動することで主語の右方転位文が下記のように派生されると分析されている。

- (i) a. [TP 太郎が [VP 花子を_i[愛している t_i]]]
 b. [Mdp [VP 花子を_i[愛している t_i]] [Md よ] [TP 太郎が t_j]]

2.2. 右方転位文の獲得

(5) 母: じゃお母さんこれ作ろう。

Tai: あの...

Tai: いいよ, これ。(Tai, 2;5,19)

→ 幼児の右方転位文は大人と同様の語用論的機能を持つ。(Nomura 2007)

(6) a. エリが 何を 食べた (の)? (OV 語順)

b. *エリが 食べた (の), 何を? (VO 語順)

→ 幼児発話においても VO 語順(= (6b))では wh 句が生起しない。(Sugisaki 2008)

2.3. 主語の格助詞の誤用

(7) 与格主語の誤用(Watanabe 2008, cf. 村杉・町田 1998)

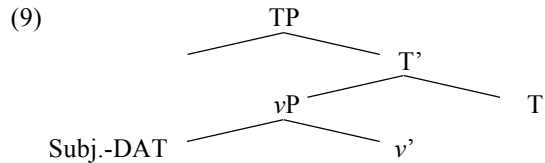
誤用の与格主語は他動詞と非能格動詞の場合に現れる。非対格動詞の場合は観察されない。

(8) a. お母さんに読んだ。(Aki, 2;8)

b. おじいちゃんに買った。(Aki, 3;0)

c. 猫ちゃんに行くんだって。(Tai, 2;2)

d. パパに行った。(Jun, 2;3)



(Case Filter 違反を避けるため主語が default Case を受け取る)

(10) 属格主語の誤用(Sawada, Murasugi and Fuji 2010)

C が誤って TP [adnominal] を選択するため, NP が Spec TP に移動し T の[Gen]素性を照合する。

(11) a. 文: [CP [TP [declarative] 太郎が/*の 本を読んだ] C]

b. NP (関係節): [NP [TP [adnominal] 太郎がの e_i 読んだ] 本_i] (「が・の」交替)

(12) (= (3))

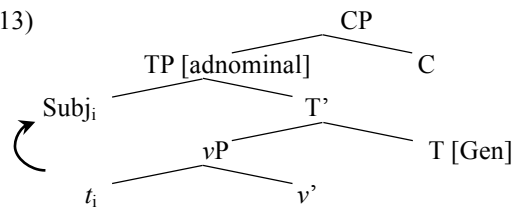
a. ジュンのこわった (=壊した) ぞー。

(Jun, 2;2)

b. タイショウ君の作った。(Tai, 1;11)

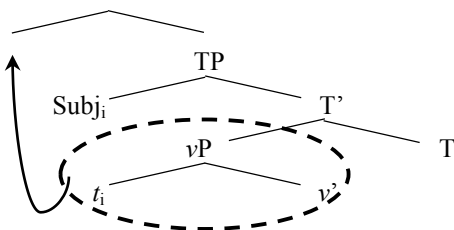
c. モコの笑っちゃった。(Moko, 2;3)

(13)



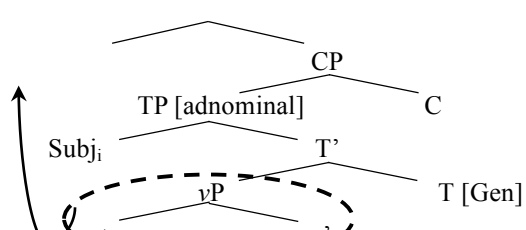
2.4. 先行研究からの予測

(14) a. 与格主語と右方転位文



主語が TP 指定部に移動することになるため, 右方転位文では与格主語は現れないことが予測される。

b. 属格主語と右方転位文



主語は TP 指定部に残っているため, 右方転位文でも属格主語が現れることが予測される。

3. CHILDES データベースによる検証

(15) 対象：

CHILDES データベース(MacWhinney 2000)の幼児 5 名 (Aki (1;5,07-3;0,0), Ryo (1;3,3-3;0,30), Tai (1;5,20-3;1,29), Jun (0;6,1-2;6,28), Sumihare (0;0,13-2;6,22)の縦断的発話記録

(16) 方法：右方転位された要素に格助詞が付されている自然発話を目視により抽出した。

(17) 右方転位された要素に主格助詞が付されている発話例

- | | | |
|--------------------------------|---------------|---------------------|
| a. 怪我したの、おじさん <u>が</u> ？ | <Experiencer> | (Aki, 2;6,29) |
| b. あるよ、ボール <u>が</u> 。 | <Theme> | (Ryo, 2;7,04) |
| c. 乗ってるよ、社長さん <u>が</u> 。 | <Agent> | (Tai, 2;2,20) |
| d. こわった (=壊した), ジュン <u>が</u> 。 | <Agent> | (Jun, 2;04,07) |
| e. 湧いたよ、お湯 <u>が</u> 。 | <Theme> | (Sumihare, 1;11,22) |

(18) 右方転位された要素に与格助詞が付されている発話例

- | | | |
|--|------------|--------------------|
| a. バラいた、ここ <u>に</u> 。 | <Location> | (Aki, 2;6,29) |
| b. 持ってくるよ、ここ <u>に</u> 。 | <Goal> | (Ryo, 2;6,23) |
| c. シューってやったらチョコレートあげると、ゾウさん <u>に</u> 。 | <Goal> | (Tai, 2;9,30) |
| d. あたうしよう (=当たるでしょう), パパ <u>に</u> 。 | <Goal> | (Jun, 2;4,15) |
| e. まだある、ここ <u>に</u> 。 | <Location> | (Sumihare, 2;2,22) |

(19) 右方転位された要素に属格助詞が付されている発話例

- | | | |
|----------------------------------|-------------|--------------------|
| a. こうやって、ここ <u>の</u> 。 | <Possessor> | (Aki, 2;6,15) |
| b. 壊れてる、リョウ君 <u>の</u> 。 | <Possessor> | (Ryo, 2;8,17) |
| c. あれ、まだ残ってる、かっか (=母) <u>の</u> 。 | <Possessor> | (Tai, 2;7,13) |
| d. 見よか、電車 <u>の</u> ？ | <Possessor> | (Jun, 2;6,14) |
| e. まんま取っていかん、僕 <u>の</u> 。 | <Possessor> | (Sumihare, 2;2,01) |

表 1. 格助詞付きの右方転位要素の発話数

	主格「が」	与格「に」	属格「の」
Aki (1;5,07-3;0,0)	4	6	5
Ryo (1;3,3-3;0,30)	7	7	5
Tai (1;5,20-3;1,29)	11	30	5
Jun (0;6,1-2;6,28)	22	12	4
Sumihare (0;0,13-2;6,22)	47	1	4
Total	91	56 (誤用数: 0)	23 (誤用数: 0)

(20) データのまとめ

- 与格助詞の付された右方転位要素は location や goal を表す。主語の解釈はできない。
- 属格助詞の付された右方転位要素は possessor を表す。主語の解釈はできない。

→ S(O)V 語順とは異なり、(O)VS 語順 (右方転位文) においては主語の格助詞の「誤用」は起こらない。

(21) 予測の検証結果

- a. 与格助詞：予測どおり，右方転位文では「誤用」が起こらない。
- b. 属格助詞：予測とは異なり，右方転位文では「誤用」が起こらない。

4. 考察

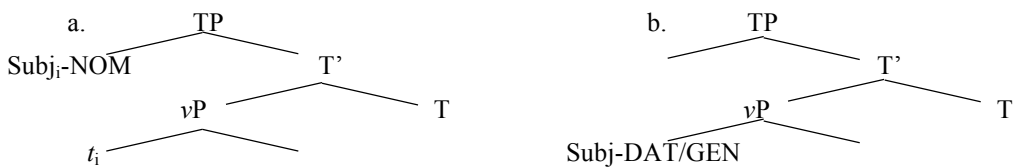
4.1. S(O)V 文と(O)VS 文の派生

(22) 問題 1：なぜ語順によって「誤用」の有無が異なるのか？

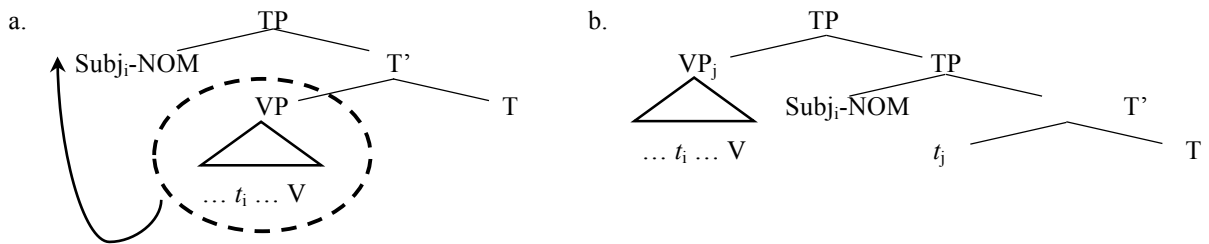
(23) 仮説 1：幼児文法では主語の TP 指定部への移動は義務的ではない。(cf. 村杉・町田 1998)

- a. S(O)V 文では主語は TP 指定部にあってもよい。
- b. (O)VS 文では語順の変更に伴い，必ず主語は TP 指定部を経由することになる。

(24) S(O)V 文の派生 (暫定) (2 タイプ)



(25) (O)VS 文の派生 (暫定) (1 タイプ)

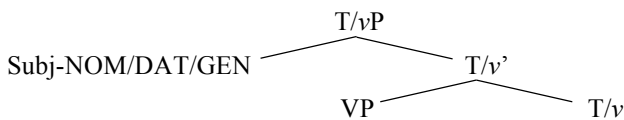


(26) 問題 2：幼児文法では S(O)V 文において主語の TP 指定部への移動がなぜ義務的ではないのか？

→ S(O)V 文での主語は，TP 的な特性 (=ガ格) とそれ以外 (=ガ格以外) が同時に出現している。

(27) 仮説 2：S(O)V 文での主語は T と v の hybrid (undifferentiated; 未分化) functional category の指定部に生起する。

(28) S(O)V 文の派生 (改訂)



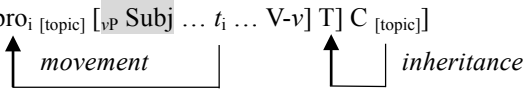
未分化の T/v の指定部にある主語は主格も，それ以外も生起できる。

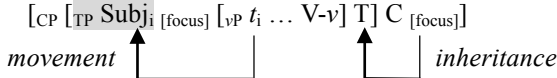
(29) 熊本方言における主語の格助詞 (加藤 2005, Nishioka 2014)

- a. 【中立叙述】手紙が／の来た。
- b. 【総記】猿が／*の人間の先祖 (です) たい。

(30) a. 中立叙述文における主語：[topic/focus]素性無し → 「が」(共通語)，「の」(熊本方言)

- b. 総記文における主語：[focus]素性有り → 「が」(共通語・熊本方言)

(31) a. [CP [TP s-pro_i [_{topic}] [_{vP} Subj ... t_i ... V-v] T] C [_{topic}]] (中立叙述文)


b. [CP [TP Subj_i [_{focus}] [_{vP} t_i ... V-v] T] C [_{focus}]] (総記文)


→ 熊本方言における主語は vP 内にあれば格標示「の」で表され (中立叙述), vP 外にあれば「が」で表される (総記)。(Nishioka 2014)

(32) 予測

もし T と v が未分化の状態であるなら, 「誤用」の属格主語には「中立叙述」と「総記」の両方の解釈が可能な文が観察できるはずである。

(33) 幼児日本語の属格主語 (團迫 2017a)

a. 【中立叙述】

子: xxx 作ろうか。

大人: うさぎさんがポケットから落ちたよ。

父: え?

子: ぼん。

子: 氷~~の~~いっぱいある, ほれ。 (Jun, 2;8)

子: あ, 大男~~の~~入っちゃった。 (Aki, 2;8)

b. 【総記】

父: タイヤ壊れてるでしょ?

母: それ誰が作ったの?

父: ジュンが壊したんでしょ?

子: たいしょうくん~~の~~作った。 (Tai, 1;10)

子: ジュン~~の~~こわったぞー。 (Jun, 2;2)

母: たいしょうくんが作ったの?

父: ジュンが壊したんやろ, タイヤ?

子: くくたー (=作った)。

→ 幼児日本語では, 中立叙述でも総記でも主語は「の」で標示できる。vP 内 (中立叙述) ・ vP 外 (総記) の特性を同時に満たすことができているように見える。

(34) 英語の獲得過程における移動と「誤用」 (團迫 2017b)

a. 一致が随意的に起こる

i. Papa have it. (Eve, 1;6) → 一般動詞: 主要部移動なし

ii. He don't have a baseball. (Adam, 3;2) → 否定文の do-support: 主要部移動なし

b. 一致が義務的に起こる

i. Does dis write? (Adam, 3;4) → 疑問文の do: T-to-C 移動

ii. dis (= this) isn't a key. (Adam, 3;3) → 否定文の be 動詞: V-to-T 移動

(35) (O)VS 文のように語順の変更 (移動) を促すような文の場合に, T と v の分化が起こる。

4.2. 右方転位文の派生と言語獲得

(36) 2 文分析 (かき混ぜ + sluicing) (Tanaka 2001: 552, (2))

a. ジョンが pro 読んだよ, ジョンが LGB を 読んだよ。 → scrambling

b. ジョンが pro 読んだよ, LGB を_i [ジョンが t_i 読んだよ]。 → deletion

c. ジョンが pro 読んだよ, LGB を_i [~~ジョンが t_i 読んだよ~~]。

→ 移動+削除が右方転位に適用でき、正しい格助詞が付与できるなら、fragment（文断片）でも（移動+削除がなされる(cf. Merchant 2004)とすれば、) 正しい格助詞が付与できるはずである。

- | | | | |
|---------|-------------------------------|------------|----------------------------|
| (37) a. | Aki-tyan-*ni. | (Aki, 2;7) | ‘Aki-tyan did take that.’ |
| b. | Otoosan-*ni. | (A, 2;9) | ‘Father must repair this.’ |
| c. | Okaasan-*ni. | (Jun, 2;9) | ‘Mother bought this.’ |
| d. | Mama-*ni. Mama-*ni. Mama-*ni. | (Ryo, 2;2) | ‘(My) mother ate (that).’ |
- (Watanabe 2008: 256, (23))

→ 予測とは異なり、fragment では格助詞の誤用が見られる。このため、2 文分析では fragment における誤用の格助詞は説明できない。

5. 結語

- (38) a. S(O)V 文とは異なり右方転位文((O)VS 文)では主語の格助詞の誤用は観察されない。
 b. この違いを捉えるために、獲得過程では未分化の T/v が投射されると提案した。
 c. 言語獲得の観点から右方転位文の 2 文分析が支持できないことを示した。

参考文献

- MacWhinney, Brian (2000) *The CHILDES Project*. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- Merchant, James (2004) Fragments and Ellipsis. *Linguistics and Philosophy* 27, 661-738.
- Murasugi, Keiko and Eriko Watanabe (2009) Case Errors in Child Japanese and the Implication for the Syntactic Theory. In J. Crawford, K. Otaki, and M. Takahashi (eds.), *Proceedings of GALANA 3*, 153-164.
- Nishioka, Nobuaki (2014) On the Positions of Nominative Subject in Japanese: Evidence from Kumamoto Dialect. To appear in *Proceedings of the 10th Workshop on Altaic Formal Linguistics (WAFLL)*.
- Nomura, Jun (2007) Japanese Postposing as an Indicator of Emerging Discourse Pragmatics, *BUCLD 31 Supplement*.
- Sawada, Naoko, Murasugi Keiko, and Chisato Fuji (2010) A Theoretical Account for the ‘Erroneous’ Genitive Subjects in Child Japanese and the Specification of Tense, *BUCLD 34 Supplement*.
- Sugisaki, Koji (2008) Early Acquisition of Basic Word Order. *Language Acquisition* 15, 183-191.
- Tanaka, Hidekazu (2001) Right Dislocation as Scrambling. *Journal of Linguistics* 37(2), 551-579.
- Watanabe, Eriko (2008) The Overgeneration of Dative Subjects in Child Japanese, *Nanzan Linguistics: Special Issue 3*, Vol. 2, 243-261.
- 加藤幸子(2005)「熊本方言における「が」と「の」の使い分けに関して」『言語科学論集』第 9 号, 25-36.
- 久野 暉(1978)『談話の文法』大修館書店.
- 黒木暁人(2006)「日本語右方転移文の構造について: 左方移動分析の観点から」*Scientific Approaches to Language* 5, 213-231, Center for Language Sciences, Kanda University of International Studies.
- 鈴木猛(2007)「日本語の獲得過程で現れる主語標識の分裂」『東京学芸大学紀要人文社会科学系 I』(58), 45-59.
- 團迫雅彦(2017a)「主文における主語の形態的具現化: 幼児の属格主語と熊本方言の比較から」, 『日本言語学会第 154 回大会予稿集』, 224-229. 日本言語学会.
- 團迫雅彦(2017b)「英語の母語獲得過程における Subject-Verb Agreement の非対称性とその統語分析」, 日本英文学会九州支部第 70 回大会シンポジウム配布資料, 長崎大学.
- 村杉恵子・町田奈々子(1998)「複合述語文の獲得: 4 歳児の場合」『アカデミア: 文学・語学編』第 66 号, 381-459. 南山大学.